

人工知能と人類の変容

久木田水生 名古屋大学大学院

2010年代の初頭に第三次人工知能(AI)ブームが始まってから10年以上が経過したが、その勢いは衰えることなく、人工知能の発展はますます加速している。特にここ数年の生成AIの発展は目覚ましく、毎日のように新しい技術的発展や応用についてのニュースを耳にする。AIはすでに様々な領域での人間の活動に大きな影響を及ぼすようになってきている。そしてそれは科学や芸術といった領域にも及んでいる。科学や芸術はある意味では人間精神の最も高度な活動、人間の文化の精髓とも見なされてきた領域であり、少し前までは人工知能の影響を受ける可能性が少ないものと言われていた。しかしここ数年の発展を見れば、もはや人間の活動の領域でAIに浸食される心配がないものはないのかもしれない。さらにAIが人間には計り知れないような「知識」や「思考」を独自に持つようになる可能性を指摘する人々もいる。

テクノロジーはこれまでも人間の生き方や社会のあり方のみならず、人々の価値観や選好、自己認識や世界観を大きく変容させてきた。人工知能もそういった大きな変革を引き起こすポテンシャルを持っている。というよりもそのような変革は今まさに進行中だと言っても良いのかもしれない。そしてその影響はひょっとしたら人類がこれまでに経験してきたどのような変革よりも幅広く深甚であるかもしれない。

このワークショップでは、人工知能の発展の現状について知り、将来どのようなインパクトを持つのかを考えるために、下記の専門家を招いて提題とディスカッションをしていた。

高橋恒一：人工知能研究者。理化学研究所バイオコンピューティング研究チーム、チームリーダー。全脳アーキテクチャイニシアティブ理事・副代表。人工知能とロボットを科学に应用する研究において日本をリードする研究者。

長谷敏司：SF作家。人工知能学会倫理委員会メンバー。人工知能を題材にした作品として『あなたのための物語』、『Beatless』、『プロトコル・オブ・ヒューマニティ』などがある。

久保明教：文化人類学者。一橋大学社会学研究科准教授。ロボットと人間の関わりに焦点を当てて研究をしており、著書に『ロボットの人類学—二〇世紀日本の機械と人間』、『機械カニバリズム 人間なきあとの人類学へ』などがある。